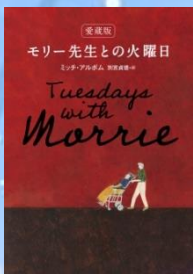


今回のテーマは「生きるとは?!」

命の尊さはみな同じであり、軽んじられるものではない。人それぞれに「生」をうけ、生きて、生きてやがて死を迎える。長さでもなく、量でもなく、そこに生きていたという事実だけが残る。無常なり。どんな生き方があっても尊いものと思いたい。



モリー先生との火曜日

ミッチ・アルボム 著 別宮貞徳 訳 NHK 出版社

僕は、大学時代の恩師モリー先生が難病 ALS (筋萎縮性側索硬化症) に侵されていることをテレビ映像で知りました。久しぶりに先生の姿をみて、会いたいと強く感じました。先生から最後の授業を受けに来なさいと提案され、毎週火曜日に先生を訪ね「人生の意味」について考えたのです。先生の病気は進行すると段々筋肉の機能が低下していきます。今日できていたことも、明日できるという保証はありません。思考や知識については何ら問題が無いから、出来なくなることへの絶望感や、喪失感をどのように乗り越えていくのかを、授業の中で語っていただきました。最初の頃は、本当に病気なのかと思うほどよく笑い、よく話しました。しかし何回目かの火曜日にはもう食事もありとれないと聞かされ、先生の話を一言も聞き逃さないという覚悟で臨みました。「これは死ぬことについての話だと思っているだろうね。だけどいかに死ぬかを学べば、いかに生きるかを学べる。」と先生は何度も繰り返えされ、先生の生きざまを見せてもらいました。

著者は、家族と過ごせる貴重な時間を、僕に割いてくれた先生に感謝をこめて、この本を書いています。この作品から「生きる意味」を考えてみて欲しいです。



菜根譚

洪自誠 著 岬龍一郎 編訳 PHP 研究所

「菜根譚」は今から400年以上前、中国・明代末の洪自誠によって書かれた処世訓です。かつて中国には「論語」「孟子」「大学」「中庸」・・・など人生を導く書が多く語り継がれてきました。その中で「菜根譚」は平凡な人がそれなりに大過なく人生を過ごすための教科書として用いられました。原書は前集222条、後集135条の合計357条が収められています。

この本は、その中から 216 条を選び編訳しています。「人生は長い」から始まり、「凡庸にいきる」、「心を静かに保つ」、「風のように生きる」「心の持ち方を変える」「あるがままに生きる」等々そこには難局を逃れるための術や、人としてのあるべき姿などが書かれています。今の自分に寄り添うような一文に出合えるかもしれません。

「菜根譚」の意味は「常に菜根を咬めば百時がなせる」で、「堅い野菜の根も苦にせずよく咬めば(苦しい境遇に耐え忍べば)、あらゆることはなしとげられる」とする古事に由来しています。自分の人生を心豊かに過ごすために読んでみてはどうでしょうか。